

Shakespeare Newsletter

日本シェイクスピア協会会報

2025 No. 2

(通巻 Vol. 65 No. 2)

Shakespeare Newsletter

日本シェイクスピア協会会報

2025 No. 2
(通巻 Vol. 65 No. 2)

目次

来年度に向けてのお知らせ	1
追悼 喜志哲雄先生	3
故喜志哲雄先生を偲ぶ	7
喜志哲雄先生との「昔の日々」	8
戦後国際派をリードした酔人の思い出	12
国際学会、観劇、Harold Pinter、そしてお酒	16
喜志先生を偲んで	19
喜志哲雄先生について	21
事務局委託に伴う新会員管理システム導入のお知らせ	24
2026 年度会費納入のお願い	25
2026 年度総会とシェイクスピア祭のお知らせ	26
シェイクスピア学会参加に関わる学生会員旅費助成についてのお知らせ	29
第 64 回シェイクスピア学会研究発表ならびにセミナーメンバー募集要項	31
国際交流フェローシップ募集のお知らせ	34
協会ホームページ掲載内容に関するお知らせ	34
2026 年度日本シェイクスピア協会委員候補者推薦会議発足のお知らせ	35
委員候補推薦のお願い	36
日本シェイクスピア協会 X について	38
協会ホームページ内「会員限定ページ」に関するお知らせ	39

シェイクスピア基金へのご寄附について	39
NOTICE BOARD	40
日本シェイクスピア協会賛助会員名簿	41

来年度に向けてのお知らせ

佐藤 達郎

コロナ禍の流行以来、外国人研究者との対面での交流は長らく途絶えていましたが、近年、ようやく状況が改善し、海外から研究者を招聘し、直接お迎えすることが可能になってまいりました。10月11日(土)、12日(日)に開催された第63回シェイクスピア学会(於日本女子大学目白キャンパス)においても、テキサス A&M 大学のロバート・スタッグ氏をお招きし、ご講演いただくことができました。講演は「シェイクスピアと中東世界の出会い」に関する刺激的な内容であり、海外研究者との対面での知的交流の大切さを実感させる、きわめて意義深い機会となりました。今後もこのような国際的な交流を積極的に促進していきたいと考えております。加えて、個々の学会発表やセミナーにおいても、多様で水準の高い研究が提示され、活発な議論が交わされるなど、学会全体としてきわめて充実した内容となりました。なお、今回のスタッグ氏の来日は早稲田大学の招聘によるものであり、講演実現にあたっては早稲田大学の冬木ひろみ先生、本山哲人先生に多大なるご尽力を賜りました。この場を借りて心より御礼申し上げます。

さて、今回は会員の皆様に、会費の支払い方法等に関する重要なお知らせがございます。これまでの納入方法に変更があり、今後は WEB を通じてお支払いいただく形へと移行することになりました。詳しい手続きにつきましては、本号に掲載されている説明をご参照くださいますようお願いいたします。

この変更の背景には、長年にわたり事務を務めてくださったスタッフが、2027年3月末日をもってご退職されることがございます。財政上その他の理由から、2027年度以降は新たに事務職員を雇用するのではなく、これまで職員が担ってこられた業務の一部を専門業者に委託し、残りを委員の皆様に分担していただく体制となりました。とりわけ会費の出入金管理につきましては、多くの学会が行っているように、専門業者へ委託することとなり、そのため会費の納入等も、業者が管理する WEB 上のプラットフォームにログインして行っていただく形になります。この件につきましては、あらためて3月末以降にメールでお知らせいたします。事務作業の簡素化のためにも、新しい方法への移行にご協力いただけましたら幸いです。何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

次に、国際学会に関するお知らせです。台湾シェイクスピア協会主催の「2026 Wenshan x TSA International Conference」が、11月29日に開催されます。Call for Papers 等の詳細につきましては、すでに会員の皆様にメールでご案内しておりますが、協会ホームページにも掲載されておりますの

で、あわせてご確認ください。また、本協会では、若手研究者が海外において国際学会で発表する際の支援を目的として、「国際交流フェローシップ」という制度を設けております。しかしながら、この制度は、若手会員の皆様に必ずしも十分知られていないようにも感じております。関心をお持ちの方は、協会ホームページの「協会概要」→「国際交流フェローシップ」をぜひご覧ください。こうした制度の活用を契機として、海外の研究者との交流がより一層深まることを心より願っております。今後とも、日本シェイクスピア協会の活動へのご理解とご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

追悼 喜志哲雄先生

金子雄司

喜志哲雄先生に初めてお目に掛かったのは、その昔シェイクスピア学会が熊本大学で開催されたときのことである。記録によれば、それは第 18 回大会で 1979 年 10 月 13～14 日のことであったから、47 年前のことになる。懇親会で先生と交わした会話の内容は今でも大凡覚えているが、それよりも印象に残っているのは、やや高いピッチのお声と速いテンポのお話振りである。その後、シェイクスピア学会でお目に掛かる機会は毎年のようにあったものの、お目に掛かれば立ち話をする程度のことであった。シェイクスピア劇上演に興味のない、また、アルコールも嗜まない私は、劇場でも酒席でも先生にお目に掛かることはなかった。

喜志先生と親しくお話をし、連絡を取り合うようになったのは 1989 年 4 月以降のことであった。同年 4 月の協会委員会で私は委員に任命され、続いて 1991 年 8 月開催予定の第 5 回国際シェイクスピア学会 (ISA) 大会 (コンGRESS) 実施に関する委員会の委員にも指名されたからである。この実施委員会は高橋康也会長、安東伸介委員、喜志委員と私で構成された。そして私は楠明子さんと高田康成さんの強力なご助力を得て、大会開催実施に関する準備を進めることになった。高橋先生、安東先生、喜志先生お三方の物心両面でのご尽力なしには、コンGRESS開催に漕ぎ着けることは難しかったであろうと今にして思う。その 3 先生が既にこの世におられない。

喜志先生のことで先ず思い起こすのは、コンGRESS開催についての先生のご尽力振りである。わが協会コンGRESS実施委員会の上部に ISA コンGRESS委員会があり、高橋会長と喜志委員がその委員であった。つまり、喜志先生は ISA と日本シェイクスピア協会双方のコンGRESS委員会メンバーであった。ところで、コンGRESS開催準備期間は 1989 年 4 月～1991 年 8 月であったので、インターネット、電子メールが普及する以前のことである。国外、国内共に情報交換は専らファクスであった。コンGRESS渉外に関する事項は喜志先生を窓口としたので、ファクスは、文字通り、昼夜を分かたずに先生宅宛てに届いた筈である。先生はご自分のご判断で返答できることは直ぐに返信をファクスで送られた。定期的に受信・送信済みのファクス用紙を当方に手渡して頂いた。返信の多くはメモ書きではなくて、書簡の体をなしていた。タイムスタンプを見ると、夜型スタイルの先生は深夜にこれらを送信されていた。その数は数百通に及んだ——大学でのご研究・教育をなさりながら、である。

ところで、コンGRESS開催直前の 1991 年 6 月に、喜志先生は『劇場のシェイクスピア』(早川書房)を上梓された。それまで先生のお仕事としては、シェイクスピア『ヘンリー六世・第 1 部』(小津次郎

共訳、1974年）、『シェイクスピアはわれらの同時代人』（蜂谷昭雄共訳、1968年）をはじめとして、現代英米劇作品翻訳があることは識ってはいた。だが、この『劇場のシェイクスピア』に納められた論文21篇のうち読んだことがあるのは3篇ほどで、他はそうではなかった。1969年論文「シェイクスピアの舞台意識」（『英語文学世界』）から1991年論文「ピーター・ブルックの『あらし』（『悲劇喜劇』）までに著されたこれらの論文の多くは、『悲劇喜劇』『テアトロ』等の専門誌に掲載された。関心領域の偏頗な私が滅多に手に取ることがない定期刊行誌のために、それらを目にすることがなかったわけである。『劇場のシェイクスピア』に収められた数々の論文は、シェイクスピア作品を論じるにあたり、劇場を論文のコアとはしているが、通常の上演論、劇評とはかなり趣を異にする立論が印象的であった。掲載された論文のうち、私に強烈な印象を与えたのは「虚構の演劇」（1971年）であった。シェイクスピア喜劇から説き起こし、王政復古期の習俗喜劇、オスカー・ワイルド、そしてハロルド・ピンターに至る「虚構の演劇」を先生は次のように語る――

この種の劇を成立させているのは、現実とは見えないものだという絶望感である。（中略）虚構はまた虚構であるがゆえに、現実とは違った自立的なものとして、現実が決してもちえない秩序を持つ。

この秩序を支えているものは、何よりもまず言葉である。言葉はものそのものではないという、まさにその点によって、『虚構の演劇』にとっては欠くべからざるものとなる。（中略）台詞を追放して、俳優の肉体――それはしばしば裸体になる――にすべてを託するような劇は、実は、現実にはむき出しにすることによって見えてくるという、自然主義以来の古めかしい幻想の産物なのだ。これからの演劇においては、言葉こそが中心にならねばならない。もちろんその言葉とは、何かのものを教示するものであるよりも、むしろ、それ自体がものとなっているような、自己完結的な存在である。（p.236）

喜志先生は30歳代半ばにして、このような演劇観を既に形成されていたことは特筆に値する。というのは、その後の先生の著作にはここでの定義による「ことば」という演劇概念が大きな意味を持つと私には考えられるからである。既にピンターの世界に入り込まれていたようである。

ところで、私は書誌学、本文校訂学、シェイクスピア作品編纂史を主に研究してきた者である。それゆえ、それ以外のシェイクスピア研究分野の知識が乏しい。既に述べた通り、上演については語るすべを知らない。そのような次第であったから、お目に掛かって話が弾んだときでも、喜志先生はそのような私に対して上演の話題を振ることはなかった。まことに都会人であった。しかし、こちらか

らその方面の話題を持ち出せば、汲めども尽きぬ泉のごとく、特定の役者、演出家、公演記録について教えてくださいなのであった。その博覧強記には感嘆する他なかった。

喜志先生のお仕事で、私にとって忘れ難いもののひとつは英文論文‘Japanese Shakespeare and English reviewers’がある。これは *Shakespeare and the Japanese Stage*, ed. Sasayama, Mulryne & Shewring (Cambridge UP, 1998) に収録された論文である。蜷川幸雄氏の演出になる『NINAGAWA マクベス』上演が 1985 年エディンバラ・フェスティバルで大成功を収めた。そして、1988 年、1992 年には『あらし』が同じく蜷川氏の演出による上演が英国で絶賛された。喜志先生はこれらの上演を観た英国の劇評家たちの記事を分析して、鋭く切り込んでいる。まずは、これら 2 作品上演が日本語によるものであったこと、第 2 に蜷川演出に色濃く見られる「日本風」舞台、第 3 に視覚＋音響効果が著しい蜷川演出、そして、第 4 にシェイクスピア劇を異文化・言語で行うことの困難さ、などについて先生は論考を重ねている。先述の通り、私は蜷川シェイクスピア上演（英国でのその上演も含めて）を観たことがない。また、喜志論文を巡って、どのような議論が専門家の間でなされてきたのかについても知識がない。つまり、この論文がどのような評価を受けて来ているか判断することが出来ない。にもかかわらず、この論文が私にとってシェイクスピア劇理解に大きな視座を与えてくれたことは間違いないことであった。この論文で喜志先生が重きを置いていることのひとつに、シェイクスピア劇が本来せりふ以外にさしたる大道具なしに演じられたことの意味を説く。英国劇評家たちに日本語で語られるせりふがどの程度理解されているのか、先生は疑問符を付している。それにもかかわらず、劇評家たちが蜷川シェイクスピア 2 作品上演を絶賛するのは、熟知している作品ゆえに、仮に日本語能力が不十分であっても、舞台上の劇進行具合を理解できると推測される。それについては、蜷川演出の視覚効果が大きな役割を果たしていることがあるとの指摘は、私には納得できる。『あらし』の冒頭部分本文を一瞥すれば、役者たちのせりふと身体の動きとによって（シェイクスピア時代に仮に何らかの音響効果が使われたとしても）嵐の状況は表現されているからである、と。つまり、先生は英国劇評家たちの反応を分析することにより、蜷川氏に対しても疑問と批判を呈しているのである。

先に述べたように、この論文に現れている喜志先生の蜷川シェイクスピア批判がどのように受け止められているかについて、私は無知である。異文化受容論の視点などからは反論がなされているかもしれない。そのことを承知の上で、喜志先生はこの論文を次の言葉で締め括る。ここには日本的演劇伝統と英国的演劇伝統に堅く裏付けされた学識無くては語る事の出来ないことばがある――

芸術作品を異文化的文脈への移植がいかに困難でありえるかを考えることは、興味深くもまた考えさせられることである。たとえ極めて前向きに応答したとしても、本質的に脆弱な姿を露呈する危険から決して逃れられないのだ。(p. 123、拙訳)

この論文からも読み取ることが出来るのは、シェイクスピア劇に限らず、劇とは先に引用した「何かのものを教示するものであるよりも、むしろ、それ自体がものとなっているような、自己完結的な存在である」ことばで成立する世界なのだ、という主張であると私は読む。

もう一冊私が多くを学んだ著作を挙げたい。『シェイクスピアのたくらみ』(岩波新書、2008年)がそれである。このご著書は既に高い評価を受けていることは周知である(2010年 AICT〈国際演劇評論家協会〉演劇評論賞受賞)。新書の分量ではあるが、シェイクスピア劇案内書として簡潔で分かりやすい。けれども、内容は浅くはない書である。既成概念にとらわれずに芝居を観ることの重要性と同時に、そうすることの難しさを説いたご著書である。先生の長年にわたる観劇行為から血肉となったお考えが、ちりばめられた著作でもある。作品ごとに割り当てられたスペースは限定的であるが、アフォリズムの様相を帯びた文章が読む者のところに響く——「我々には、他人が演技をしているかどうかは、本当は分からない。我々は、他人の見かけを真実として受容れる他ないのである」(p. 61)

喜志先生とのお付き合いを通じて常々感じていたことは、先生の芝居に対する熱い情熱とそれを学問的冷静さでもって分析して言葉に換えるエネルギーの強さであった。冒頭に記したとおり、先生とのお付き合いはシェイクスピア協会がらみのことが多かった。さりながら、ご著作を通じて、また、折節に仰ったお言葉を通じて、芝居・劇場のシェイクスピアを読む上で、喜志先生は私の師と呼ぶべき存在であったし、これからもあり続けるだろう。この希有なる scholar critic であられた先生のご逝去は実に寂しい限りである。

故喜志哲雄先生を偲ぶ

楠明子

数多くの Shakespeare 研究の国際学会の中でも私が特に強い関心を抱いていたのは、2 年に一度、シェイクスピアの生誕地 Stratford-upon-Avon にある The Shakespeare Institute (University of Birmingham 内に 1951 年設立) で開催される学会である。「世界中からの参加希望者を受け入れるスペースとしては限界がある」と言う理由等のもとに、この学会には研究所からの直接のご招待がない限り出席できない。世界中から選ばれた約 130 名のシェイクスピア学者が、1 週間ほど集う学会で、夜には近くのシェイクスピア劇場での観劇も含まれていた。私が初めてこの学会にご招待頂いたのは、今から数十年前になるが、その時の感激を今でも忘れることができない。

私のような若手の学者は、他の出席者の邪魔にならないように、出来るだけ人目につかないようにしなくてはと思いながら初日の開会式に臨んだ。各研究発表の後には質問のセッションが設けられていたが、こちらも息をひそめて質疑応答を聞いていた。その時、会場に響きわたる大きい声で堂々のご質問をなさったのが若き日の喜志哲雄先生であった。しかも、先生は発表者の一回目の説明にはご納得なさらず、更に複雑な問題点が含まれる 2 つ目の質問に進まれた。この質問者が、若い日本人学者であったのは私にとってショックであった。

国際学会という場所は、おとなしく発表者の意見を聞くだけではなく、発表者とのコミュニケーションを通じお互いの力を発展させるべきところでもあるということを目の当たりにした。

その後、お陰様で私自身も他国のシェイクスピア学者との交流が一層広がり、共著やセミナーの共同企画への参画等私の研究も更に楽しく実り多いものになっていった。

あの時、喜志先生の毅然とした態度を拝見することがなかったら、私自身のその後の学問は異なっていたかもしれない。この後も、喜志先生とはベルリンやプラハの国際学会でもご一緒させて頂き、相変わらずお元気な先生から多くを学ばせて戴いた。

喜志哲雄先生、長年にわたりいろいろとご指導いただき誠にありがとうございました。

ご冥福を心より祈念申し上げます。

2026 年 1 月 31 日

喜志先生との「昔の日々」

加藤行夫

今は昔、私が初めてシェイクスピア学会で研究発表の機会を与えられたのは 1978 年の秋、信州大学においてであった。「シェイクスピア劇の〈スポットライト〉」と題して『ハムレット』の黙劇の場を論じたものだが、劇を見る観客の意識には視野に入っている部分と入っていない部分がある、という仮説に立った、かなり際物的な内容だった。案の定、真っ先にフロアの三神勲先生から、舞台上にあるのに観客に見えていないなんて、と疑問が呈されたのだが、そのとき、いや、歌舞伎ではあり得ることですよ、と弁護してくださったのが、司会を務めていらした喜志哲雄先生だったのだ。私が 20 代、その後 50 年の永きにわたって先生から受けた数えきれない恩の、思えばそれが最初の出来事だった。

やがて私は京都大学の教養部に移ったが、文学部の喜志先生は雲の上の存在で、年に一度の京大英文学会か入試の採点で同席するくらいであった。直接お話を伺う機会があればと願っていた次第だが、折しも『英語青年』で「観客論」の特集があり(1985 年 4 月号)、恩師の岡本靖正先生のもと、笹山隆先生、安西徹雄先生が座を囲み、喜志先生と私が単独論文を書くという企画があった。先生はハロルド・ピンターによる『昔の日々』(*Old Times*)の観客反応について論じておいでだったが、シェイクスピア劇の諸場面を広く扱った私は、これは格好の話題になってくれるだろうと、意気込んで先生に私論のご感想を伺ってみた。が、期待に反して、先生は気まずそうに話には乗ってこられなかった。おそらく、私の論文はお読みになっていなかったか、あるいは理屈が先に立った拙論をしち面倒くさいと途中で読むのをお止めになったのか、おそらく後者なのだろう。

当時、シェイクスピア研究の領域では「観客論」が隆盛を極めていた。ドイツでハンス・ローベルト・ヤウスが受容理論を唱え、前後して日本でも外山滋比古先生の「読者論」が知られていた、その流れのなかに笹山先生の『ドラマと観客』(1982 年)があり、喜志先生の『劇場のシェイクスピア』(1991 年)があった。笹山先生は理論派で、観客意識の現象学的解明を目指したのに対し、喜志先生は実践的で、上演の実態に重きを置いていた。そのためもあってか、私の「演劇空間の〈隔離〉と〈融合〉」と題するその「観客論」は、青臭い空理空論(タイトルからして)に振り回されたものと拒否反応を示されたのだろう。確固たる事実を重んじる京都学派と言うべきものがあったのかもしれない。しかし、ともかくも理論と実践のあいだにあって、私は、シェイクスピア研究の当該領域に関しては、岡本先生、外山先生、笹山先生、そして喜志先生という、国内東西の泰斗の警咳に接する幸せな位置

に身を置いていたことは確かなのだ。

1987年、私は筑波大学に移り、同時に、金子雄司氏とともにシェイクスピア協会の事務局をお手伝いすることになった。それまでの体制では、長く小津次郎先生が会長を務め、委員も固定的だったのだが、改革の機運が高まり、柴田稔彦先生の音頭で、一般会員から委員を推す選挙制度が採用された。新体制では、高橋康也先生(1989-97年)、玉泉八州男先生(1997-99年)、と続いたあと、1999年、喜志先生が日本シェイクスピア協会会長となった。就任と同時に、先生は積極的に改革に着手され、そのひとつが協会の公式ホームページを立ち上げることで、これは協会の活動を広く内外に知らしめることに寄与した。もうひとつは *Shakespeare News* の刊行を従来の年2回から3回とし、これまでは会員への単なるお知らせ的役割しかなかった機関誌に学術論文を掲載するようにしたこと。現在、*Shakespeare News* は研究誌 *Shakespeare Journals* と会報誌 *Shakespeare Newsletter* に分けられているが、会員の活動範囲を拡大させたこれらの改革の意義は計り知れない。必然的に *Shakespeare News* は大幅な増ページとなったが、その版下作成をすべて自前で、つまり DTP (desktop publishing) で行ない、経費を削減した。私は当時、岡本先生を研究代表者とする科研費を得て、「コンピュータによるシェイクスピア劇のト書き研究」に関与していたので、パソコンの操作には慣れていて、そのため、ホームページの作成とともに、これらの作業に私が抜擢され、それが契機となって喜志会長との距離が一挙に縮まることになった。

とりわけ *Shakespeare News* には先生は力を入れ、毎号の巻頭に会長所見を掲載し、編集内容に関してほとんど連日のように私と連絡を取り合った。先生は夜通し仕事をし、明け方に寝酒を飲んでお休みになるという毎日を送っていたので、おのずとメールでのやり取りは深夜2時、3時ということになる。私も夜型の生活を送っていたので、それはまったく苦ではなかった。ようやく最初の版下ができ上がったとき、私は「あとがき」に、DTPの作業は楽しいもので、思ったほどの苦労はなかった、という意味のことを書いたが、先生から書き直しを命じられた。自分たちが携わった改革とそれにまつわる新しい仕事が軽く見られることを避けたかったのだろうか。DTPの作業は辛く苦しいもので、想像以上に大変だ、と私は意に反して書き改めたのだが、実際には、先生とともに編集作業をすることは私にとって光栄なことであり、何より本当に楽しかったのだ。細部のことば遣い、こだわり(「芸術」は「藝術」と表記すべき、とか)から、文章作法に至るまで、教えられることは数知れず、大変貴重な経験となった。

楽しかったことで思い出すのは、やはり学会、というより学会前後のこと——喜志会長就任の年の秋は岩手大学で行われた。われわれは開催日の前日から現地入りし、学内の宿泊施設を借り切って翌日午前中の委員会に備えた。その前夜は喜志先生を囲んで宴が始まり、高邁な演劇論から下

世話なゴシップまで、愉快痛快な話の数々、もっぱら聞き役だった委員たちも、アルコールが入り、あたかも中年の修学旅行のごとき大騒ぎ、夜も更けるにつれ酔いつぶれる者も出て、学会担当の小澤博氏と私とで担いで各部屋に運び込む。翌朝、施設で用意してくださっていた朝食をきちんと召し上がったのは喜志先生ただひとり、二日酔いの朦朧とした頭で委員会に出席したわれわれは厳格な金子事務局長の響を大いに買った。

その翌年、神戸松蔭女学院大学で学会が開催されたときのこと、懇親会のあと、二次会、三次会と飲み続け、最後のカラオケ・バーでは、先生はマイクを手に、次はオペラ歌手のプラシド・ドミンゴ風に、とひとしきり美声を張り上げてお歌いになった。すでに夜は白々と明け、そのまま場は大学のチャペルに変わり、先生はしめやかに讃美歌を口ずさんでおいでだった。日曜日に学会を組むための条件として、朝の礼拝に参列することが求められていた学会員を代表して、せめて会長と委員は出るようにしていたのだ。結果、礼拝堂の一角はアルコールの匂いが充満し、まさに清濁併せ呑むとはこういうことを言うのだろう。とにもかくにもシェイクスピア協会が元気な時代ではあった。

楽しかった思い出に引きずられてつい筆が先走ったが、先生の大きな功績は、何より国際的な場での活躍にある。ご自身の業績のみならず、4年ごとに世界各地で開催される世界シェイクスピア会議を1991年、日本シェイクスピア協会主導で東京での実現に貢献されたし、隔年にストラットフォードで行われるシェイクスピア・インスティテュート主催の国際シェイクスピア学会に若手の日本人が参加できるように尽力されたのも先生だ。名の知れた欧米のシェイクスピア学者を次々と日本に招聘したし、学術誌 *Shakespeare Survey* などへの論文掲載に日本人研究者を積極的に推薦したりもした。先生は常々、国際化は当たり前のこととおっしゃっていて、ときにブリスベンの海岸町でオーストラリアワインを味わいながら、ときにエイヴオン河ほとりのパブでエールを飲みながら、日本とまったく変わらない自然体で酒席を楽しんでいた。

かくして *Shakespeare News* の会長所見は2年間続いたが、その任期の最終号に「ふたつのシェイクスピア映画」(Vol. 40, No. 3, 2001年)と題する論評をご執筆になった。ジュリー・テイモア監督『タイタス』(1999年)とケネス・ブラナー監督『恋の骨折損』(1993年)についてだが、とりわけ後者は1930年代のミュージカル映画をパスティーシュ風に仕上げたもので(ということは先生の説明を読んで初めてわかったのだが)、フレッド・アステアらによる各々既存の元歌がシェイクスピア喜劇のなかでいかにうまく使われているかを指摘された。これはいわば複合的な観客意識による『恋の骨折損』の見方なのだが、それを可能にする先生ならではの該博にはただ驚かされた(これが先生の本領だということは後に、『ミュージカルが《最高》であった頃』(2006年)とその姉妹編『ミュージカル映画が《最高》であった頃』(2024年)によって私は遅まきながら知ることになる)。

Shakespeare News の編集の任を解かれてからも先生とのメールは変わらず続いた。むしろ、協会の仕事を離れるようになってますます先生の執筆活動は盛んになり、毎晩のように、その日に書き上げた原稿を送っていただき、いち早く拝読する特権が与えられた。先生の豊富な演劇体験と正確な記憶力には圧倒されるばかりだったが、私は通り一遍の感想しか述べることができなかった。こうして書き上げられた主なご著書は、先に挙げたミュージカル論のほか、『英米演劇入門』(2003年)、『喜劇の手法——笑いのしくみを探る』(2006年)、『シェイクスピアのたくらみ』(2008年)、『劇作家ハロルド・ピンター』(2010年)。それに加えて、演劇雑誌『悲劇喜劇』に連載していた「私が観た名優たち」や「イギリス劇信」などのほか、シェイクスピア劇の新訳『から騒ぎ』(2020年)も含まれる。

その深夜のメールのなかで、私はついプライベートなことまで口走って、先生に助けられたことがある。まだ学生だった私の娘とアパートの家主との間で金銭的なトラブルがあり、どうしたものかと気を揉んでいた折、お忙しい先生が内容証明郵便の送り方から訴状の書き方(相手の言い分を少しでも認めてはいけない、等々)、簡易裁判所に持ち込むまでの手続きすべてを教えてくださいました。おかげで弁護士の世話にならずに裁判は勝訴したのだが、どうしてそんなにお詳しいのかと尋ねた私に、先生ご自身が翻訳した劇を無断で使われたことがあって裁判を起こしたことがあるというお答えと同時に、実は自分は、文学部ではなく法学部に進もうと考えていたと打ち明けられた。

その文学部を先生は、学部長・研究科長という最大の重責まで果たされる。そして、京都大学定年後は文化庁のお仕事を委嘱され、上演される演劇作品を実際に観て審査する委員をなさっていた。毎月の新作公演には私の席も取ってください、ご一緒することができた。帝国劇場など一流の劇場での観劇を楽しんだあとの先生の行きつけは、いまは無いが下町の神田明神食堂という、自分で好き勝手に惣菜を取ってコップ酒をあおる文字通りの大衆酒場で、その落差に見合って話題は多種多様、わが国の俳優たち演出家たちの仕事ぶりから英米の学者たちの裏事情まで、尽きることなく夜を徹した。少しも酒量の衰えることのない先生に一度、健康診断などされないのですか、と伺ったら、医者に行けば必ず何か言われるから行かない、と笑っていらした。美味しいと思えるものが身体に一番いいんだ、とも。実際、病気ひとつしたことがなく、頑健であった先生からの年賀状には、毎年決まって「また一献を」ということばが添えられていた。

突然の訃報は、だから、いまだに信じられない。長い年月にわたり膨大な量になるメールは、つい昨晩も送られてきたような気がするのに、今夜はもう届かない。豪放磊落な、それでいて細やかな心遣いのできる先生、行く先々までお酒を飲む相手を確認しておかれた先生、いまごろは誰と一献を傾けているのだろうか。

戦後国際派をリードした酔人の思い出

高田康成

喜志哲雄先生は、兆民の言う意味での「酔人」でした。しかし生まれ育ったのが昭和の戦中戦後となれば、豪傑君はもとより西洋紳士になるはずもなく、戦後特有の「国際派」の酔人を見事に貫かれたと思います。

戦後特有の国際派といっても、大きく言って二つの型があるように見えます。一つは、いわば「敗戦を嘔みしめた」人々で、シェイクスピア学者では笹山隆先生がその代表として挙げられましょうか。もう一つは、敗戦をさほど引きずることなく、「新時代への希望に燃えた」かに見える人々で、喜志先生はその代表格の一人だと思います。敗戦時の記憶はもとより払拭しがたいものであったはずですが、しかしその後、高校生時代に偶々観ることになったミュージカル映画の『雨に歌えば』が、まずは喜志先生の人生にとって決定的であったようです。後年の好著『ミュージカルが《最高》であった頃』(2006)には、その消息が窺えます。

大学卒業後には、待ってましたとばかりに、ガリオア・フルブライト基金の奨学資金を得て、ようやくニューヨークへと向かったのです。ニューヨークに滞在した9ヶ月のあいだに、優に100本の芝居は見たといえます。となれば大学よりもミュージカルや芝居に足繁く通ったのではないかと思うのですが、事実は真面目に講義等にも出ていたようなのです(これについてはすぐ後に触れます。)とまれ芝居に加えて講義にもまじめに通った、その甲斐あってか、英語は話さざる書かざる聴かざるがデフォルトという、この独特の英文学の伝統にあって、喜志先生はその高貴な慣行を見事に打ち破る先兵の一人となったのです。「(「街角に立つ女性と料金交渉ができるのは喜志君くらいだ」という今やレッド・カードでしかない冗談は、笹山隆先生からも高橋康也先生からもよく聞かされたものです。)それどころか、早くもニューヨーク滞在の最中において、喜志先生の生得の耳の良さは自覚をもって確認されたのです。「こんな響きをもった台詞を劇場で聞いたことは一度もない、日常生活の言葉遣いをこれほど生々しく再現し、しかもそれを劇的効果にみちた台詞にすることができるこの劇作家はなんと耳がいいのだろう」(『劇作家ハロルド・ピンター』[2010])、とエドワード・オールビーの『動物園物語』を観た・聴いたときの評言は、そのまま喜志先生の耳の良さを証します。)

既定の留学期限が切れたのちにも、喜志先生は大西洋を渡ってロンドンへ赴き、いよいよ本場の芝居めぐりを濃密に堪能しました。「(コロンビア大学の)学年が終わると、私はロンドンへ行き、ニューヨークにいた頃にもまして劇場通いに精を出した。もはや大学の講義に出る必要はないのだから、

時間はいくらでも自由になる」(『劇作家ハロルド・ピンター』)。そして、1961年7月20日のウィンザーにおいて決定的な瞬間が訪れる。ピンターの『管理人』との衝撃的な邂逅でした。高橋康也先生の場合のベケット体験と同じように、このピンター体験は喜志先生の世界を根本的に変えてしまうほどのものでした。20代半ばのことでした。

もちろん劇場通いは、その後の数か月間も変わらず続きました。その資金的支援はどこから得られたのだろうか、というなんとも下卑た疑問がおのずと生じます。1ドル360円・1ポンド1000円の時代に、かくなる贅沢三昧を可能にしたのは、ひとえに父親の力添えによるもの、とあるとき感謝の念を込めて語っておられました。御父君は、昭和32年に三浦洸一が歌って大ヒットした『踊子』の作詞者として名を馳せた喜志邦三氏だったのです。

まさに趣味と実益をかねたロンドン芝居詣では、帰国してからも、時間と軍資金が許すかぎりほぼ定期的に行われることとなります。しかしそもそもこの年中行事を職業的な成果へと結びつけるには、高度の「ヒアリング」能力が前提とされます。このことは改めて想起されねばなりません。あるとき、「留学は30歳以前にしなければ駄目です」と、例によってきっぱりと断言されたことがありました。ずば抜けた生得の聞き取り能力に恵まれていた喜志先生にして、そのように言わしめた背景には、若き日のニューヨークとロンドンでの日々が、それこそヒアリング訓練の道場でもあったということなのでしょう。10代を戦後間もない日本で一つまり英語を耳にすることさえ容易ではなかった環境で(ちなみに1950年生まれの筆者でさえそうでした)一英学事始めをした国際派研究者の、プロフェッショナルとしての矜持がそこには感じられました。

すでにレジェンドと化してしまったかに見えますが、1991年の夏、日本シェイクスピア協会はWorld Shakespeare Congressを東京で開催しました。アジアで初めてのことでした。その招致に並々ならぬ熱情を傾けてこられた小津次郎先生は、1988年にロンドンで客死され、その成果を見ることができませんでした。国際化の波を気にかけておられた先生だけに、ご自身もさぞ無念であったに違いありません。文字通り弟子の末席を汚していた筆者としても同じ思いでした。

WSC東京招致の是非を巡っては、日本シェイクスピア協会の首脳陣の間で、必ずしも意見の一致を見ていたわけではありませんでした。1984年頃だったでしょうか一手帳を頼りに記憶を手繰るのですが、いっかな時期が同定できません—その是非を決するいわば最終の手打ち式に当たる会合が、銀座玉寿司(中野里皓史先生の御兄弟が社主ゆえに協会はよく利用した)2階の大広間で開かれました。錚々たる協会の重鎮が居並ぶなか、どういうわけか一兵卒の最年少会員として愚生(当時東北大学文学部助教授になり立て)が呼ばれたのには、小津先生に思うところがあったのでしょう。(その1週間ほど前でしょうか、先生から電話を頂戴し、かくかくしかじかの会合があるので「ま

あ、若い世代の意見として、君なりの考えを言ってくれたまえ」とのこと。洒脱な先生のこと、生臭い話には立ち入りません。)ただ愚生のような者にまで召集令状を出されたところから察するに、先生として、たとえわずかでも国際派の加勢を増やしておきたかったのだらうと推察しました。実際、愚生のような者の耳にも届く風評からしても、ときの形勢は思いのほか厳しいものと判断されました。しかし幸いにも結果は案ずるに足らず、WSC招致は正式に決まり、実行へ向けて動きだしたのです。

容易に想像されるのですが、協会の国際派の中核として小津先生が全幅の信頼を寄せていたのは、遠く京都に居をかまえる喜志先生に他なりません。それ以前の何回かの WSC にも喜志先生は常連として出席しており、東京大会のゴーサインが出たとなれば、WSC本部との重要なやり取りは、あたかも当然至極のように、喜志先生を窓口として行われることになりました。当時はメールなどという便利なものはなく、頼るべきは FAX のみ。かくして喜志先生の自宅の書斎に置かれた FAX は、数年にわたって昼夜を問わず稼働し続ける運命となりました。時折、自ら「Faximilian 何世」と名乗って、労苦を笑いに転じておられたのは、喜志先生の Falstaff 並みの太っ腹と懐の深さを物語ります。

日本シェイクスピア協会として空前絶後の国際大会を終えた後も、協会と ISA との唯一無二の貴重なパイプ役として、引き続き喜志先生が貢献してくださったことは、周知のとおりです。就中、日本シェイクスピア協会として常に銘記して忘れてはならないことがあります。ISA は、WSC 東京大会の成功を多として、ストラトフォードで隔年に開催される ISA 大会への参加メンバーシップに関して、日本シェイクスピア協会へのクォータを大幅に拡大したのです。そしてこの異例の大盤振る舞いが実現した舞台裏にあって、喜志先生の外交官はだしの「人脈づくりの妙技」が大いに与って力があつたことは公然の秘密でした。日本シェイクスピア協会は、喜志先生から賜ったこの恩恵をゆめ忘れることなかれ。

最初に喜志先生にお目にかかったのが果たしていつこのことであつたのかは、残念ながら記憶にありません。ただ 1980 年代になってからは、学会関連でお会いする機会によく恵まれ、その場合はきまって深酒をする決まりでした。該博な知識と犀利な批評が酔うほどに丸みを帯びて緩みをみせる、しかし寝てしまわれることはあつても、不愉快な言動に及ぶようなことは一度としてありませんでした。残されたご著書を頼りに懐かしく思い出すのは、あの切れ味の良い短文のつらなるカテゴリーカルな言説を十二分に伝える朗々たる声なのです。

喜志先生にお会いする最後となつたのは、2014 年 4 月 18 日のこと、東京の英国大使館で開催されたシェイクスピア生誕 450 年を記念しての小シンポジウムにおいてでありました。その年、海外ではいたるところでシェイクスピア生誕 450 年記念を祝して大いに盛り上がりおりました。この国際的

な大きなうねりのなかで、どういうわけか日本ではそれに同調する動きが認められませんでした。なかでも象徴的存在であるべき日本シェイクスピア協会はあたかも鎖国に眠るがごとくに見えました。おそらく内向きには何某かのことはしたかもしれないのですが、残念ながらシェイクスピアの母語である国際共通語でお祝いをする気配は感じられなかったのです。(これは個人的印象に過ぎなかったかもしれませんが、実際には国際的な何某かのイベントがあったのかもしれません。その場合には、当時の会長がどなたか存じあげませんが、お詫びして訂正するに吝かではありません。)

というわけで、まずは国際派の重鎮たる喜志哲雄先生に生誕 450 年記念小シンポジウムの趣旨について打診したところ、果たしてご快諾を頂くことに成功。この強力な後ろ盾の下に、英国大使館のご支援を得て、本当にささやかなものでしたがシンポジウムを企画実行することが叶ったのでした。当日の登壇者としてご協力くださったのは、もう一人の国際派の重鎮であられる楠明子先生ならびに(当時東大駒場の同僚であった)ロバート・キャンベル先生でした。

記念小シンポジウムの終了後は、喜志先生ゆかりの一杯が欠かせません。大使館で軽く済ませてから、近隣の飲み屋へと繰り出しました。その日のうちに京都へお帰りの喜志先生、「これからジパングクラブを使って京都へ」とおっしゃりながら、満面に笑みを浮かべて「車中でもう一瓶」と付け加えるのを忘れませんでした。これが今生の別れとなってしまいました。

国際学会、観劇、Harold Pinter、そしてお酒

廣田篤彦

喜志哲雄先生の訃報を受けたのはリスボンにおいてであった。およそ 30 時間かけて到着し、ようやくホテルにチェックインして確認したメールの中に文学研究科の事務からの報せが転送されていた。2025 年 6 月 30 日ご逝去、享年 89 歳。

先生に最後にお会いしたのは 2022 年 11 月、コロナ禍後初めて対面で開催した京大英文学会という同窓会組織の年次大会に the Shakespeare Institute 名誉教授の John Jowett さんをお招きした講演の時であった。しばらく前から歩行には幾分難儀されていたものの、とてもお元気で、講演後の夕食の席でもワインを楽しそうに飲みながら会話の中心となっておられた。喜志先生をご存知の方は、その優れた国際感覚に裏付けられた国内外の学会でのご活躍や海外の研究者とのお付き合い、そして、それに必ずついてくるお酒を必ず思い出されるであろう。先生はこの時もお手本を見せてくださったのであった。

喜志先生に初めてお目にかかったのは、1991 年夏、東京で行われた the World Shakespeare Congress であった。大学院生の支援グループの一員であった私が、大会運営の中心を担われるお一人であった先生と直接お話をする機会はなかったと思うが、当時の東京グローブ座で行われた開会式が終わり、劇の上演に移る前の休憩に入る際に、司会をされていた先生が閉会の辞に続けて、「ここは東京で、京都と違って 15 分は 15 分なので遅れずに戻ってくるように」という意味のコメントを挟まれたことを覚えている。あらかじめ用意されていたのであろうが、そうとは思わずに、何語であろうとこのようなことをさりと言える、これこそが、私にとって喜志先生のお人柄を示す絶好の例であり続けている。(ずっと後に Howard Brenton の *Never So Good* を先生と一緒に観る機会があったが、劇中 Winston Churchill が議会演説でのアドリブを練習している場面で、私はこの開会式のことを思い出していた。)

次にお目にかかったのは東京で勤め始めて間もなく、京都での日本英文学会であったろうか。喜志先生が中心となって京都に呼ばれたと聞いているが、東京のコンGRESSで全体講演の一つをされた Stephen Greenblatt さんが講演をされた学会であった。この時初めて先斗町の先生の行きつけの店での二次会に誘われたのだったと思う。そしてその少し後には、モントリオールで、初めて一対一でお酒のお供をすることになった。The Shakespeare Association of America の年次大会に出席するため、会場となっていたホテルに夕方着いてチェックインを待っていると、この学会にあわせて行わ

れた the International Shakespeare Association の会議を終えられた先生から声をかけられた。その夜はホテルのレストランでご馳走になり、そして最後は先生のお部屋で深夜までお付き合いしたのであるが、既に京大への赴任が決まっていた私にくださった「(ご自身とは)違うことをしているのだから、何も気にすることはない」というお言葉は、先生の後任として未知の環境に身を置こうとしていた私にはこの上ない激励であった。

その後、先生とはニューオリンズで、ボストンで、サンディエゴで、ブリスベンで、プラハで、ストラットフォード・アポン・エイヴオンとロンドンで、盛岡、福岡、金沢、大阪、東京、そして京都で、幾度となくご一緒し、国内外の学会の話、上演の話、また大学運営の話(先生は文学研究科長を務められた)を伺った。その幾つかは、後に私自身に関わることになった際に思い出し、身の処し方を決める参考となっている。しかし、一番楽しそうだったのは、観劇後、観たばかりのお芝居について話される時であったかもしれない。英国でも開演前に軽い夕食を摂る人が多くなっているようで、終演後に開いている店を探して、コヴェント・ガーデン界隈をしばらくうろつき回ったこともあったが、大抵はシーフードと白ワインにありついて、私のような頼りない聞き手を相手に、演技について、また、前もって必ず読まれていた戯曲について熱心に語られていた。一軒だけでは足りないときは、トッテナムコート・ロードまで歩いて、先生の定宿の中のバーでビールを手にさらにお話を伺った。特に記憶に残っているのが、David Souchet と Zoe Wanamaker が出演した *All My Sons* の後である。2010年の夏であったようである。この晩の上演は私でもそうとわかる熱のこもったもので、舞台と観客席が一体になった盛り上がりを実感したが、先生も二人の熱演を幾分興奮気味に振り返りながら杯を重ねておられた。

もう一つ忘れてはならないのが先生と Harold Pinter との交流である。知らない人も多いであろうが、先生は Pinter からの手紙(直筆を含む)を数多くお持ちで、それらを一括して the British Library に寄贈された。偶々ロンドンにいた私は、先生に誘われて、その手紙が配架された書庫にお供させていただいた。巻いたパピルス文書が保管されている一画を通して主任司書に案内された棚で、その手紙は世界中の研究者や愛好家の手に取られることを待っているはずである。Pinter の戯曲を観た後は、ときには劇作家ゆかりのレストランで、お二人の交流、戯曲の内容、そして観たばかりの上演について貴重なお話を伺うことになったのは言うまでもない。その幾つかは授業で学生に話し、彼らに喜志先生の教えをわずかながらでも伝えられたことを嬉しく思っている。

リスボンでは、ホテルから遠く見えるテージョ川に、ミシシッピ川を前にしたニューオリンズのレストランの記憶を重ねてポルトガルのワインを飲んだ。きっとこの白はお気に召したであろう、などと思いながら。帰国後、先生と交流のあった幾人かの人たちに訃報を伝え、the International Shakespeare

Association の現 chair の Peter Holland さんや、Shakespeare's Birthplace Trust でこの学会の事務局を担っている Paul Edmondson さんからは先生を悼む言葉を頂いている。Edmondson さんは、Stanley Wells さん、東京コンGRESの準備を一緒にされ、先生と特に親しかった Roger Pringle さんと共にシャンパンのグラスを上げたとも書き送ってくださった。2026 年 7 月には 12 回目となる the World Shakespeare Congress がヴェローナで開催される。ここでは、先生とも仲が良かった友人たちと共にイタリアのワインのグラスを上げることになる。先生も一緒に味わってくださっていることを信じて。

喜志哲雄先生、長い間どうもありがとうございました。

喜志先生を偲んで

竹村はるみ

師に恵まれた私には、恩師と仰ぐ先生が何人かいる。その中でも、喜志先生は最も近くて遠い存在だった。芝居とお酒をこよなく愛した喜志先生は、フォルスタッフを思わせる体型のせいか、常に人の輪の中心にいるイメージがある。でも、私にとってはどこか近寄りがたい、孤高の先生だった。

喜志先生の批評は、まずもって無駄がない。「我々は日常生活においても、自分の目で楽に見ることができるものを見るために鏡を使ったりはしない。鏡は普通のやり方では見えないものを見るために使われるのだ。とすれば、「自然に向って鏡をかかげる」という言い方には、自然の捉えにくさ、人間の現実認識の不完全さについての意識が潜んでいると見るべきであろう」。芝居を鏡に喩えたハムレットの有名な台詞の意味を超え、芝居とは何か、文学とは何かという命題について、これほど的確に述べた文章を私は他に知らない。余計なことは何一つ言わず、意味するところは極めて明解である。簡潔にして見事に要を得たこの一節には、野暮とは無縁だった先生の研ぎ澄まされた知性と感性が凝縮されている。

洒脱で機知に富む喜志先生は、冗談もスマートで、こちらにそれなりの教養や知力がないと即座に理解できない。だから、緊張するのである。無論、その場しのぎのごまかし笑いが通用するような先生ではない。「教室の前の方に座って、うんうんとうなずきながら聞いている学生がいますよね。ああいうのに限って、何もわかっていません」と言われた時など、まさにそういうタイプの学生だった私は、嫌な汗をかいたものである。

喜志先生は英語力も本物だった。本物というのは、日本語を話す時とまったく同じ調子で意思疎通ができるのである。私が在籍していた頃の京大では、毎週のように海外の大学から研究者を迎えて講演会が開かれ、その後は近くの居酒屋に移動して宴会という流れがお決まりだった。喜志先生はお酒が入ると時々眠くなることがあったが、寝入ってしまった先生を私達がクスクスと笑っていた時に、やおら目を開けた先生がニヤリと笑って“*I am immune to any kind of insult*”とつぶやき、爆笑した高名な学者が先生を愛しそうにハグしたことを懐かしく思い出す。“*immune*”の意味がわからない愚鈍の弟子は、こっそりと辞書を調べて、感嘆のため息をついたものである。

憧れてやまないものの、先生の前に出ると萎縮するという関係は、卒業後も続く。私は常々「喜志先生の不肖の弟子」と名乗ってきたが、それは決して謙遜ではない。先生の前に出ると、私はいつも劣等感の塊だった。理由は二つある。まず第一に、私は芝居を見ない。正確に言うと、宝塚以外

の芝居をほとんど見ない。なにしろ観劇体験の99パーセントが宝塚歌劇でできている私は、先生の芝居の話の相手にてんでならないのである。喜志先生に引け目を感じるもう一つの理由は、研究上のことだ。私は海外で研究成果を発表したことがほとんどない。もっと芝居を見ろとは一言も仰らなかつた喜志先生も、さすがにこれは遺憾に思われただのだろう。一度だけ、学会でお目にかかった際に注意を受けたことがあった。発表でも出版でも、とにかく英語で研究成果を発信して、海外の研究者とのネットワークを築くことがいかに重要か。それを実践してきた先生だからこそ、さぞかし歯がゆい思いをなされたに違いない。が、貴重な助言もむなしく、その後も英語になるとだんまりを決め込む私にさじを投げたのか、あとは何も仰らなかつた。二言はないのが喜志先生である。

ほめることはないが、けなすことはもつとない。宴席は好むが、噂話を好まず、他人の悪口を言うのを聞いたことがない。喜志先生とは、そういう先生だった。せっせと送り続けた論文の抜き刷りや本を読んでくださったかどうかは、わからない。京大流の放任主義に善し悪しはあるだろうし、正直言って若い頃は「せめてウンとかスンとか言ってくれ」と思ったこともあるが、教師として齢を重ねると、ハードボイルドに放任主義を貫くのは難しいものだとわかる。えてしてつい口を出したくなるのが教師の性分だが、それが必ずしもよいとは限らない。さんざん口を出し過ぎた結果、まるで自分の論文のパロディのようになってしまった学生のレポートや論文を見るにつけ、好き勝手に研究させてくれた喜志先生の懐の深さに手を合わせる。

そんな先生だけに、私の初陣を見守ってくださった時の喜びは忘れられない。宵っ張りの喜志先生の授業は常に3時限以降だった。午前中にお姿をお見かけすることはまれな先生が、院生時代の私が熊本大学で開催された日本英文学会で初めての学会発表に臨んだ時、朝10時の開始時刻にもかかわらず、随分と早めに来場して聞いてくださった。後日恐る恐る感想を伺いに研究室をお訪ねしたところ、「内容のことは僕にはよくわかりませんが」と前置きした上で、マイクの使い方が不安定だったことと、気をきかせたつもりで話の枕として発表冒頭で話したことが余計だったことの2点を戒められた。単刀直入に本題に入るべし、という喜志先生の教えはその後肝に銘じている。

昨年暮れに上梓した拙著『シェイクスピアと宝塚』を読んだ方が、喜志先生との師弟の絆を感じたと書き送ってくださった時に、思わず涙がこぼれた。それは、執筆中に何度も感じたことだったからである。こと宝塚のことになると、観劇の楽しさや喜びを語るができる自分の発見は、「喜志先生の弟子」としての自分の再発見でもあった。でも、もう刊行の頃には、拙著を読んで下さるほど先生の健康状態が思わしくないことを風の便りに知り、せつない気持ちになった。

お酒も飲めない不肖の弟子だったが、喜志先生を偲んで献杯。

喜志哲雄先生について

栗山智成

喜志哲雄先生が定年退官なされたのは私が修士課程 2 年次の時であった。先生の演習は、受講生が原文を読み上げてから日本語に訳していくというスタイルで、戯曲解釈をご著書からではなく授業で直接お聞きしたいと思うこともあった。英米演劇史やミュージカル史の講義でもご自身の演劇・藝術観が中心になることはなかった。むしろ、テキストのコピーが配布されて、具体的な台詞をもとに物語がどのように展開するかが丹念に辿られ、時折、ご覧になった上演や俳優の演技の様が、詳細に、そして実に生き生きと語られていく。解説の際には、言い淀みや言い間違い、言葉の誤用などは一切なく、腹の底から響く声で朗々と、推敲されたかのような端正な文章で、的確にまっすぐにお話になった。お話になる際のこうした特徴は、授業外でも、日本語でも、英語でも、最晩年に至るまで変わることはなかった。

ミュージカルの授業では、歌や台詞のテキストを確認してから、その箇所の CD を聴くこともあった。劇展開の紹介はあれど、詳細な解釈が添えられるわけではないので、教室を埋め尽くす受講生たちは歌や台詞のポイントを掴もうと、息を飲んでじっと音声に聞き入った。先生はおそらく、ご自身の見方を教え込もうとするのではなく、作品それ自体の楽しさや深みを、受講生がそれぞれに体験し、考えるよう導いておられたのだ。

こうした授業スタイルが先生の藝術観にも根ざしていることがわかってきたのは後年のことである。たとえば『劇作家ハロルド・ピンター』（研究社、2010 年）には、次のような文章がある。「かりにピンターの劇が分りにくいとすれば、それは彼の作品が《不条理劇》であるからではなくて、彼が詩人の感覚で言葉を使っているからだ。ピンターのいわゆる難解さは、彼が愛読したイェイツやディラン・トマスやフィリップ・ラーキンの詩を読む場合のように、テキストの言葉に全神経を集中させ、一語一語を丁寧に吟味しながら作品を読んだら、ほとんど解消されるに違いない。」(p. 480)

しかし先生にとって戯曲テキストは単に精読する対象ではなかった—「二時間あまり経ってウィンザーのシアター・ロイヤルから出て来た時、私の人生は変っていた。こういう声を劇場で聞いたことはそれまでに一度もなかった。『管理人』を観たのは(と言うより、『管理人』を聴いたのは)、『動物園物語』の場合と同じく、全身を打ちのめされるような衝撃的な体験だったが、私は、『動物園物語』の時には感じなかった戸惑いを味わっていた。」(上掲書、p. 5)—こうした文章から、先生にとって戯曲の言葉は詩的、音声的、立体的な存在であったことがよくわかる。

先生のご著書には、演劇の意義の一つについて、「我々には一度に一つの像しか捉えることができない。その意味で、現実には常に一義的である。しかし、現実と見えているものは虚構かも知れない。こういう存在の多義性を悟らせてくれるものが演劇である。」(「虚構の演劇」1971年、『劇場のシェイクスピア』早川書房、1991年所収、p. 225)という指摘がある。そして、こうした演劇を支えるものが「言葉」である—「この秩序を支えているものは、何よりもまず言葉である。言葉はものそのものではないという、まさにその点によって、『虚構の演劇』にとっては欠くべからざるものとなる。[...]これからの演劇においては、言葉こそが中心とならねばならない。もちろんその言葉とは、何かのものを表示するものであるよりも、むしろ、それ自体がものとなっているような、自己完結的な存在である。」(上掲書、p. 236)先生の授業スタイルはこうした藝術観に根ざしていたように思われる。

印象深い思い出は数多くある。ピンターが亡くなってしばらく経った頃、ロンドンでお目にかかった際に墓参りに連れて行ってくださった(というより、私が付いていった)こと、地下鉄に乗りながらこの劇作家との様々なエピソードを教えていただいたこと、私が京都大学に韓国スンチョンヒャン大学のヒョンヌ・リー教授と学生さん方を招聘し、共同プロジェクトを行った際にお越しいただいたこと。私たちは『冬物語』の原語上演を行い、日本の学生はシチリア島を舞台とする前半を、韓国の学生はボヘミアを舞台とする後半を担当したのだが、先生には発表だけでなく懇親会にもご参加いただき、その席で、こうしたイベントは戦中戦後の日本では考えられなかった、こうした交流はたいへん重要であり、戦争なき世界にも結びつくはずだと、喜志先生にしては珍しく情感を込めて、幾度も幾度も語っておられた。

その際にふと頭をよぎったのは、先生が *Shakespeare in Japan* (Continuum, 2005) を始め、多くのご論考を英語で発表なさるだけでなく、International Shakespeare Association の理事など、国際学会での重責を長年務めておられたのも、国際交流、国際平和といったことを意識しておられたからではないだろうか、ということだった。折につけ「僕は戦中派だから」というフレーズを使っておられたことも思い出される。ピンターが反戦の人であったことも、先生がこの藝術家に共鳴された要因の一つであったのかもしれない。

先生は、芸術作品から時事問題まで真正面から、核心を突く批評をなさった。演習や論文試問での指摘が同じように厳しく、鋭いこともあり、受講生一同にとって先生はひたすら畏怖する存在であった。実際のところ私も母校に勤めるようになるまで、私的な会話の機会をほとんど持たなかった。しかし、今思い返すと、こうしたイメージとは裏腹に、先生はさまざまな世界・領域を繋げた方であった—文学研究と上演現場、国内学会と国際学会、研究と創作、歌と文学、台詞劇とミュージカル、英米の藝能と日本の藝能、といったように。

先生は、『間違いの喜劇～現夢也双子戯劇～』(2013年、文化庁芸術祭賞受賞)、『東男迷都路』(『ヴェローナの二紳士』の翻案、2015年)、『西海渡花香』(『恋の骨折り損』の翻案、2017年)というシェイクスピア翻案戯曲三部作も執筆なさり、これらは兵庫県のピッコロシアターで上演された。兵庫県立ピッコロ劇団の方々と喜志先生とお酒をご一緒したことがある。そこで先生は研究の場でお聞きするのはまた異なる、現場の方々に寄り添うお話をなさっていた。やはり言い間違い、言い淀み一つなく、腹の底から凛々と響く声で、まっすぐにお話になって。活発なやり取りを拝聴しながら、二つの世界が深く交流していくことを実感したものだ。

そのような稀有な先生は昨年6月30日に89歳でお亡くなりになった。広大なご見識に再び接するためにはご著書を繰り返し拝読するほかないのだろう。しかし、あのお声を通して直接お話を拝聴することが叶わなくなったことに寂寥の念を禁じ得ない。先生に心より哀悼の意を捧げます。

事務局委託に伴う新会員管理システム導入のお知らせ

平素より、シェイクスピア協会の運営に格別のご理解とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。

さて、このたび事務局業務の委託に伴い、2026 年度より新たに会員管理システム「シクミネット」を導入することとなりましたので、ご案内申し上げます。

2026 年度より、本協会ではシクミネットを用いて、会員情報の管理および会費納入の手続きをオンライン上で一元化いたします。

これは、事務局体制の変更に伴い、会員の皆様の情報およびご入金状況を正確かつ円滑に管理するためのものであり、あわせて会員の皆様にとっても、より便利にお手続きいただける環境を整えることを目的としております。

2026 年 3 月末以降、会員の皆様には ID およびパスワードをお届けいたします。お手元に届きましたら、シクミネットにログインのうえ、マイページにてご登録情報をご確認いただくとともに、会費のお支払い方法をご選択くださいますようお願い申し上げます。

お支払い方法は、

- ① コンビニ決済
- ② クレジットカード決済
- ③ 金融機関 ATM (Pay-easy)
- ④ バーチャル口座決済
- ⑤ 銀行口座引き落とし

の中からお選びいただけます。いずれも簡単な操作でお手続きいただけます。

具体的な操作方法につきましては、3 月末以降に ID・パスワードとあわせて詳細をご案内いたします。

なお、オンラインでのお手続きにご不安がある場合や、ご事情によりインターネット環境のご利用が難しい場合には、事務局までご相談ください。可能な範囲で丁寧にご案内し、必要に応じて個別に対応させていただきます。

本協会としては、今後は原則として本システムを通じたお手続きをお願いすることとなりますが、移行期間中は会員の皆様の状況に配慮しながら進めてまいります。

会員の皆様に安心してご利用いただけるよう、丁寧に移行を進めてまいりますので、何卒ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2026 年度会費納入のお願い

2026 年度(2026 年 4 月 1 日～2027 年 3 月 31 日)の会費(一般会員 8,000 円、学生会員 5,000 円)の納入につきまして、3 月末以降に、会員管理システム「シクミネット」の ID およびパスワードをお送りいたします。

お手元に届きましたら、システムにログインのうえ、マイページからお支払い方法を選択し、会費をご納入くださいますようお願い申し上げます。

なお、会費のお支払い方法および操作手順の詳細は、ID・パスワード送付時にあわせてご案内いたします。円滑な協会運営のためにも、6 月末日までの納入にご協力くださいますようお願い申し上げます。

2026 年度総会とシェイクスピア祭のお知らせ

2026 年度の総会ならびにシェイクスピア祭は、2026 年 4 月 26 日(日)に対面で開催される予定です。シェイクスピア祭は、日本英文学会・日本シェイクスピア協会の共催で行われ、一般公開(非会員は要事前申込)で無料です。お誘いあわせのうえ、奮ってご参加ください。

シェイクスピア祭一般参加者登録フォーム

<https://forms.gle/66SSwbxCG5KbyhnEA>

* 協会員の方は申し込み不要です。



なお、本協会規約(9)により、「総会は、委任状を含む会員の過半数の参加によって成立」します。総会に出席できず議場委任して下さる会員におかれましては、以下のフォームから **2026 年 4 月 19 日(日)**までに委任の意思を示していただきますようお願いいたします。

総会出欠フォーム

<https://forms.gle/96i2EhuN2DMKkoNcA>



やむなく開催形式が変更となる場合には、日本シェイクスピア協会ホームページ(<https://www.s-sj.org/>)にてご連絡いたします。

日時:2026 年 4 月 26 日(日)

12:00~12:30 総会

13:00~16:40 シェイクスピア祭

場所:日本女子大学 目白キャンパス 百二十年館 B1F 12001 教室

[東京都文京区目白台 2 丁目 8-1]

最寄駅からのアクセス

■ JR 山手線「目白駅」から徒歩 約 15 分

バス 約 5 分(都営バス白 61「日本女子大前」バス停)

■ 東京メトロ副都心線「雑司が谷」駅(3 番出口)から徒歩 約 8 分

■ 東京メトロ有楽町線「護国寺」駅(4 番出口)から徒歩 約 10 分

シェイクスピア祭 プログラム

13:00 開会の辞 佐藤 達郎(日本シェイクスピア協会会長・日本女子大学教授)

13:10 講演 河合 祥一郎氏(東京大学教授)

「『ファヴァシヤムのアーデン』をシェイクスピアの正典に加える問題をめぐって」

14:40 休憩

15:00 トーク 菅野 文氏(漫画家)

テーマ「『薔薇王の葬列』シリーズとシェイクスピア」

聞き手 松山 響子氏(駒沢女子大学教授)

16:30 閉会の辞 阿部 公彦(日本英文学会会長・東京大学教授)

講演要旨 「『ファヴァシヤムのアーデン』をシェイクスピアの正典に加える問題をめぐって」

2016 年にオックスフォード版新シェイクスピア全集に、『ファヴァシヤムのアーデン』が収められた。この作品をシェイクスピアの正典に加えることを疑問視する声もあるが、作品を丁寧に読み込むことによって見えてくるものがある。講演者は、オックスフォード版編者らの決断を尊重し、原文を丁寧に読み込んだうえで翻訳し、それをもとに本邦初の上演も企画した。そもそもシェイクスピアらしさとは何なのか、本作を試金石としてシェイクスピア的な要素に迫りたい。

トーク要旨 「『薔薇王の葬列』シリーズとシェイクスピア」

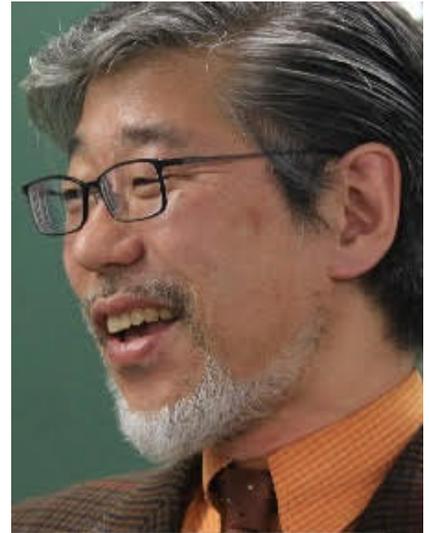
『薔薇王の葬列』シリーズは日本では上演の機会が少ないシェイクスピアの『ヘンリー6 世』3 部作と『リチャード 3 世』を原案にした漫画家菅野文の作品です。菅野文氏は『薔薇王の葬列』

以前にも、『オトメン(乙男)』(白泉社)という作品でも知られており、現在は「チャンピオンクロス(秋田書店)」誌上にてギリシャ神話を原案にした『冥王の柘榴』を連載中です(既刊2巻)。本トピックでは『薔薇王の葬列』シリーズを中心にシェイクスピア作品に興味を持ったきっかけや、シェイクスピアをはじめとする「古典」を創作の原案とすることについて伺っていきます。

***** 講演者プロフィール *****

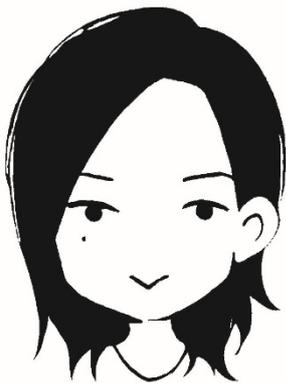
河合 祥一郎(かわい・しょういちろう)氏

坪内逍遙の兄・義衛の玄孫。東京大学教授。ケンブリッジ大学と東京大学より博士号取得。著書にサントリー学芸賞受賞作『ハムレットは太っていた!』(白水社)、共著に *The Routledge Handbook of Shakespeare and Interface* (英ラウトリッジ社、2022)ほか。最新刊はシェイクスピアの新訳『タイタス・アンドロニカス/ファヴァシヤムのアーデン』角川文庫。2026年11月21日~29日、調布市せんがわ劇場にてシェイクスピア作『ファヴァシヤムのアーデン殺人事件』(訳・演出=河合)を日本初上演する。



菅野 文(かんの・あや)氏

東京都生まれ。2001年「花とゆめ」(白泉社)に掲載の『ソウルレスキュー』でデビュー。代表作『オトメン(乙男)』(白泉社)は大ヒットを記録し、TVドラマ化もされるなど社会現象となる。2013年より「月刊プリンセス」(秋田書店)にて『薔薇王の葬列』の連載を開始。ウィリアム・シェイクスピアの戯曲『ヘンリー六世』『リチャード三世』を原案に描かれた本作は、累計発行部数200万部を突破し、TVアニメ化・舞台化を果たすなど高い評価を受けている。現在、webマンガサイト「チャンピオンクロス」(秋田書店)にて『冥王の柘榴』を連載中。



シェイクスピア学会参加に関わる 学生会員旅費助成についてのお知らせ

日本シェイクスピア協会では、学生会員の学会参加を支援するために、研究発表者もしくはセミナーメンバーとしてシェイクスピア学会に参加する学生会員に対して旅費の助成を行います。

本助成金に必要な書類「シェイクスピア学会参加旅費助成申請書」は、日本シェイクスピア協会のホームページからダウンロード可能です。

【シェイクスピア学会研究発表者・セミナーメンバー旅費助成要項】

日本シェイクスピア協会では、学生会員の学会参加を支援するために、研究発表者もしくはセミナーメンバーとしてシェイクスピア学会に参加する学生会員に対して旅費の助成を行います。

1. 申請資格

当該年度に学生会員として日本シェイクスピア協会に所属している者。

2. 助成対象

シェイクスピア学会に研究発表者もしくはセミナーメンバーとして参加する場合の交通費および宿泊費。

3. 助成額

国内在住者 5 万円、海外在住者 10 万円を上限とし実費を助成します。

交通費

- 1) 交通費は、申請者の現住所から大会開催校までの最も効率的な交通手段にかかる経費とします。
- 2) JR を利用する場合、申請者の現住所から大会開催校の最寄り駅までの最短距離の料金の往復切符を購入するものとします。

- 3) 特急券は普通車指定席を購入するものとします。
- 4) 航空券はエコノミークラスを購入するものとします。

宿泊料

必要と認められる宿泊 1 泊につき上限 14,000 円まで。交通費とのパック 料金も対象とします。

4. 申請に必要な書類

申請者は、以下 3 点の書類を PDF など電子化し、事務局 (ssj-secretary@nifty.com) に電子メール添付により提出してください。メールの件名は、「学生会員旅費助成申請」としてください。申請受領後、確認メールをお送りします。申請送信後 4 日経っても確認メールが届かない場合は、お手数ですが再度事務局もしくは学会担当 (ssj-conference@nifty.com) までご連絡ください。なお、領収書については、原本の提出を求めることがありますので、助成の決定から 1 年間は保存してください。

- ① シェイクスピア学会参加旅費助成申請書
- ② 申請金額が適正であることを証明する書類(路線検索による料金表等)
- ③ 交通費・宿泊費の領収書(「日本シェイクスピア協会 申請者本人」宛)

5. 申請期間

当該年度の 10 月末日までに申請してください。

6. 助成の決定

シェイクスピア協会委員会で審査の上、助成を決定します。

※審査の結果、必ずしも満額助成されるとは限りません。また、助成されない可能性もありますのでご了承ください。

7. 重複申請について

他の旅費助成等に申請している者は、本助成には申請できません。

第 64 回シェイクスピア学会 研究発表ならびにセミナーメンバー募集要項

第 64 回シェイクスピア学会は、2026 年 10 月 3 日(土)・4 日(日)の 2 日間にわたり、筑紫女学園大学(福岡県太宰府市)にて開催されます。つきましては、下記により研究発表ならびにセミナーメンバーを募集いたします。応募要項をご覧のうえ、奮ってご応募ください。

記

◇ 研究発表

【応募要項】(締め切り日にご注意ください。応募方法は E メールです。)

1. 一般研究とし、テーマを問いません。ただし、未発表のものに限ります。
2. 応募者は研究発表概略(和文 2,000~4,000 字、または英文 800~1,500 語)を、WORD 形式のファイル(A4 用紙縦設定の横書)にしてメールに添付してください。
3. 学会プログラム資料原稿用に、研究発表要旨(和文 400 字、または英文 150 語以内)を、WORD 形式のファイル(A4 用紙縦設定の横書)にして E メールに添付してください。
4. 簡単な経歴書を、WORD 形式のファイル(A4 用紙縦設定の横書)にして E メールに添付してください。
5. 応募者の氏名、所属・肩書き、連絡先住所・電話番号・E メールアドレスを E メール本文に明記し、上記 2.「発表概略」、3.「要旨」、4.「経歴書」の計 3 点のファイルを添付して、日本シェイクスピア協会(学会担当)宛に送信してください。なお、以上 2~4 の書類はそれぞれ独立のファイルとして添付してください。
6. 応募 Eメールの送信先を日本シェイクスピア協会(学会担当)ssj-conference@nifty.comとし、件名に「研究発表応募」と明記してください。
7. 応募原稿ファイルは返却いたしませんのでコピーをお残してください。
8. 締め切りは **2026 年 6 月 6 日(土)正午**です。
9. 審査結果は 7 月中旬に応募者あてに通知いたします。
10. 日本シェイクスピア協会会員であること(=当該年度の会費納入者)が応募の資格です。

◇セミナー

学会 2 日目に以下の 3 つのセミナーを企画しました。

【応募要項】(締め切り日にご注意下さい。応募方法は E メールです。)

1. 下記セミナーのうち 1 つのみ応募できます(応募は会員に限ります)。
2. ご希望のセミナーテーマを明記のうえ、ご発言の「主旨」を、日本語 200 字以内(または英語 100～150 語)にまとめ、WORD 形式のファイル(A4 用紙縦設定の横書)にして E メールに添付してください。また「氏名・所属・肩書き・連絡先住所・電話番号・E メールアドレス」を E メール本文に明記してください。
3. 応募 Eメールの送信先を日本シェイクスピア協会(学会担当) ssj-conference@nifty.com とし、件名に「セミナーメンバー応募」と明記してください。
4. 応募締切は **2026 年 5 月 4 日(月)正午**です。
5. 各セミナーとも、コーディネーターと協議のうえ、メンバーの数を限ることがあります(コーディネーターは会員外のゲストを 1 名入れることができます)。
6. 応募の採否については 6 月下旬までに本人宛に通知します。
7. セミナーメンバーに決定した方は、研究発表に重ねて応募することはできませんので、ご注意ください。

各セミナーの① コーディネーター、② テーマ、③ セミナー指針は次の通りです。セミナー3 のメンバーは、学生・若手を含め、より広く会員に対して開かれております。修士課程の大学院生も含めて、学生会員の皆様にもぜひ奮ってご応募いただきたく存じます。

《セミナー1》

- ① 石塚倫子氏(東京家政大学客員教授)

コメンテーター: 佐々木和貴氏(秋田大学名誉教授)

- ② シェイクスピアと植物

- ③ セミナー指針

シェイクスピア作品にはさまざまな植物の言及があり、作品解釈の上でも重要である。『夏の夜の夢』、『お気に召すまま』では、木々や花々のシーンが不可欠である。『ロミオとジュリエット』や『リチャード 2 世』ではハーブ園や庭園が劇全体のテーマと交差する。さらに、『終わりよければすべてよし』、『ロミオとジュリエット』、『シンベリーン』では薬草、毒薬、眠り薬が劇展開の重要な役

割を果たす。

このセミナーでは、シェイクスピア作品の植物に注目し、当時の社会背景や生活・文化も視野に入れ、作品を再読していくことを目的としたい。具体的には、近代初期の医学と薬草／毒草、食物としての植物、造園につながる鑑賞用植物、花言葉や恋人を表す象徴的意味での植物などを含む。そこからさらに当時の科学／迷信の様相、ジェンダー、階級の政治学にも議論が及ぶことを楽しみたい。

《セミナー2》

- ① 内丸公平氏(東洋大学准教授)
- ② Shakespeare for Freedom
- ③ セミナー指針

シェイクスピア研究が高度に細分化・専門化するなかで、私たちはそもそもなぜシェイクスピアに向き合っているのかという大きな問いをつい見失いがちになってしまいます。なぜシェイクスピアは今も重要なのか——それは、Jonathan Bate、Stephen Greenblatt、Ewan Fernie などの学者たちが情熱的に語っているように、シェイクスピアが実存的かつ政治的な自由の原動力になってきたからではないでしょうか。19 世紀には、英国のチャーティストやサフラジェットの運動、ハンガリーの革命運動、日本の自由民権運動において、詩人はインスピレーションの重要な源になっていました。そこで、本セミナーでは、シェイクスピアが描いた自由、そしてシェイクスピアが後世にもたらした自由を扱いたいと思います。作品の精読、上演、翻案、グローバルな受容、テキスト編纂など、メンバーの関心に応じた多様な研究分野を横断しながら、シェイクスピアは自由について私たちに何を教えてくれるのか、学問的に検証します。

《セミナー3》

- ① 吉原ゆかり氏(筑波大学教授)
コメンテーター：南隆太氏(東京経済大学教授)
- ② シェイクスピアの死後の生
- ③ セミナー指針

シェイクスピアの作品が、その後の時代や別の地域にどのように継承されてきたのか、その文化的・政治的・歴史的背景を考察する。「シェイクスピア」が残した作品は21世紀の今日にいたるまで、さまざまな変容を経て継承され、「死後の生」を営んでいる。王政復古期シェイクスピア作

品翻案、18 世紀大詩人崇拜の誕生、1864 年世界最古のシェイクスピア協会であるドイツ・シェイクスピア協会創設、1957 年黒澤明『蜘蛛の巣城』、2025 年 Taylor Swift “the Fate of Ophelia” など、「シェイクスピア」は時代やメディア、地理的境界線を超えて蔓延する。西洋の文化的帝国主義の成果と考えるか、「シェイクスピア」の普遍性の証と考えるか、「シェイクスピア」を神聖にして犯すべからざる起源とするのか、「シェイクスピア」作品をコピーライト・フリーの加工自在な素材としてみなすのか。このような問題に迫りたい。

国際交流フェローシップ募集のお知らせ

審査時期は 4 月、10 月の年 2 回ですが、応募要件に記されている通り、参加を予定している学会の開催日より 2 か月前の応募であれば、審査の対象となり、さかのぼっての支給となる場合もあります。詳細については当協会のホームページをご覧ください。

協会ホームページ掲載内容に関するお知らせ

以下については、日本シェイクスピア協会ホームページをご覧ください。ご要望をお伝えいただければ、プリントアウトをお送りします。

規約全文、シェイクスピア祭報告詳細、学会セミナー報告、
シェイクスピア・ワークショップ報告、国際交流フェローシップ応募要項、
Shakespeare Studies 投稿規程、*Shakespeare Journal* 投稿規程、
日本シェイクスピア協会奨励賞規程、入会案内

2026 年度日本シェイクスピア協会委員候補者推薦会議 発足のお知らせ

委員候補者推薦会議議長
篠崎 実(千葉大学名誉教授)

このたび、日本シェイクスピア協会委員会より、2026 年 9 月末から 10 月に行われる予定の委員選挙について、委員候補者推薦会議の議長を委嘱され、非力ですがお引き受けいたしました。

同会議は議長のほか三名以上の会議員によって構成されることになっていますが、今回は会議員を次の三氏にお願いいたしましたところ、さいわいご承諾いただきました。

冬木ひろみ氏(早稲田大学名誉教授)

由井哲哉氏(フェリス女学院大学教授)

高森暁子氏(筑紫女学園大学准教授)

以上の構成員によりこれから選挙に向けての作業を開始いたしますので、どうぞよろしくご協力のほどお願い申し上げます。

委員候補推薦のお願い

現在、日本シェイクスピア協会委員会は以下の 15 名(会長を含む)によって構成されていますが、そのうち*印の 7 名(2024 年度選挙での当選者)が 2027 年 3 月末日をもって委員の任を退きます。

李 春美	(大阪国際工科専門職大学)	伊澤 高志*	(立正大学)
Daniel Gallimore	(関西学院大学)	木村 明日香	(中央大学)
栗山 智成*	(京都大学)	小林 潤司*	(鹿児島国際大学)
近藤 弘幸*	(学芸大学)	佐藤 達郎	(日本女子大学)
阪本 久美子*	(日本大学)	竹山 友子	(関西学院大学)
団野 恵美子	(大阪芸術大学)	土井 雅之*	(関西学院大学)
松岡 浩史	(熊本大学)	松田 幸子*	(高崎健康福祉大学)
松山 響子	(駒沢女子大学)		

つきましては、日本シェイクスピア協会規約に従い、その後任の選挙を行いますので、以下の要領で委員候補者の推薦をお願いいたします。

1. 書式 別記の書式による
2. 締切り 2026 年 6 月 25 日(火)必着
3. 宛先 〒112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1

日本女子大学文学部英文学科 佐藤達郎研究室内

日本シェイクスピア協会委員候補者推薦会議

なお、参考資料として「日本シェイクスピア協会規約」(協会ホームページ掲載)をお読みください。特に次の点にご留意ください。

1. 候補者及び推薦人は日本シェイクスピア協会の会員である必要がありますが、この場合の「会員」とは、2026年9月15日までに2026年度の会費を納入した者としてします（「委員選挙に関する内規」第7条[2020年12月18日改正]に基づく）。
2. 「会長、委員及び監事の選出に関する規程」第2条第1項の「満65歳を超えたもの」は、委員就任時の年齢を言います。したがって、今回の候補者は1962年4月1日以降生まれの会員ということになります。
3. 今回の選挙の候補者数は、選出されるべき委員数7名の1.5倍以上、すなわち11名以上です（「会長、委員及び監事の選出に関する規程」第3条第7項[1999年10月23日改正]）。
4. 委員退任後、2027年3月末日までに4年以上を経過した会員は候補者となることができます（「会長、委員及び監事の選出に関する規程」第2条第3項[1999年10月23日改正]）。
5. 今回の選挙について、委員候補者名簿(50音順)を9月下旬から10月上旬に会員に送付し、10月から11月の委員候補者推薦会議が指定する期間に、Webによる投票を行います。メールで送付するWeb上の投票用紙を用いて、改選される数の委員を選んで○をつける方式となります（「委員選挙に関する内規」第2条[2020年5月17日改正]に基づく）。
6. 今回の選挙は、Webによる投票となります。また、9月16日以降(学会時を含む)に会費を納入された会員は投票権を有しないこととなります。円滑な協会運営のためにも、会員の皆様にはなるべく早く会費の納入をお願いいたします。

委員候補者推薦書の様式(記載例)

2027年4月1日就任予定の委員の候補者として、下記の会員を推薦します。

ふりがな

候補者 氏 名 (所属)
(生年月日)

2026年 月 日

推薦人

氏 名 (所 属)

* 推薦人氏名は5名以上の連記(「会長、委員及び監事の選出に関する規定」第3条第5項)、自署によるものとします。推薦人になられる方は、会費の納入が終了していることをご確認ください。

日本シェイクスピア協会 X について

日本シェイクスピア協会の X アカウントでは、ホームページ掲載情報の告知や学会時のプログラム等に関する情報提供、協会の活動に関するお知らせを、協会会員ならびに一般向けに発信しております。協会ホームページとあわせて、ぜひご覧ください。

協会ホームページ内「会員限定ページ」に関するお知らせ

日本シェイクスピア協会では、2021年8月より協会ホームページ内に会員限定のページを開設いたしました。

会員限定ページは毎年7月に更新するアクセスパスワードで管理され、このページには協会が催すオンライン行事のアクセス情報など、会員限定の情報を随時掲載してまいります。2025年度のパスワードにつきましては、当該年度会費納入会員にお知らせしております。会費を納入済みにもかかわらず通知が届いていない方は、事務局までお問合せください(shakespeare-japan@nifty.com)。

日本シェイクスピア基金へのご寄附について

日本シェイクスピア協会では、円滑な事業運営や新規事業の推進のため、ご寄附をお願いしております。

2025年3月1日から2026年2月28日までに皆様から頂戴したご寄附の総額は190,000円となりました。ご寄附を賜りました皆様への感謝の気持ちを込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。

寄附者名簿

(会員:50音順)安達 まみ様、蒲池 美鶴様、関場 理一様、高田 康成様、山田 昭廣様

Notice Board

◆ 2025年10月11日 第3回定例委員会を日本女子大学目白キャンパスにて開催。議題は以下のとおり。1)第64回シェイクスピア学会の概要、2)2026年度シェイクスピア祭の企画、3)65周年記念論集について、4)その他(①事務局業務の委託について、②70周年小史について)。

◆ 2025年10月11日、12日 第63回シェイクスピア学会を日本女子大学目白キャンパスにて開催。詳細については協会ホームページをご覧ください。

◆ 2025年12月7日 第4回定例委員会(チーフ会議)をオンラインにて開催。議題は以下のとおり。1)第64回シェイクスピア学会の概要、2)事務局業務の委託について、3)その他。

◆ 訃報。会員の藤田實氏が2026年2月12日に逝去された。享年94。大阪大学名誉教授。1991-1995年、1997-1999年協会委員。主著に *Pageantry and Spectacle in Shakespeare*、*Transvestism and the Onnagata Traditions in Shakespeare and Kabuki* 等がある。

◆ 2026年3月13日 *Shakespeare Newsletter* 2025(通巻 Vol.65)No.2 を刊行。

◆ 2026年3月中旬 『2025年度日本シェイクスピア協会簡易会員名簿』を刊行予定(原則として協会ホームページ内「会員限定ページ」に掲載予定)。

◆ 2026年3月25日 *Shakespeare Studies* Vol.64 を刊行予定。

◆ 2026年3月25日 *Shakespeare Journal* Vol.12(通巻 Vol.65)を刊行予定。

日本シェイクスピア協会賛助会員名簿（五十音順）

板橋演劇センター

エディション・シナプス

劇団山の手事情社／(有)アップタウンプロダクション

株式会社 研究社

株式会社 大修館書店

株式会社 文学座

SHAKESPEARE NEWSLETTER

日本シェイクスピア協会会報

2025 (通巻 Vol. 65 No. 2)

編集	2026年3月13日発行 日本シェイクスピア協会
発行人	佐藤達郎
発行所	東京都文京区目白台 2-8-1 日本女子大学文学部英文学科 佐藤達郎研究室内
印刷	日本シェイクスピア協会

© 日本シェイクスピア協会 2025